



Thick back photo by Minori Yoshitani

東南アジアを海から眺めると、「国境」の代わりに、人びとが縦横に行き交ってきた海上の道が見えてくる。この連載では、アジアの海に生きる人びとの暮らしと、それをとりまくさまざまな状況を伝えます。

# 南沙諸島に沈んだ男

赤嶺 淳

ダリオが死んだ。死因は潜水病。享年四五歳。フィリピン中部のサマル島出身のかれは、ビサヤ諸島、サンボアンガ、ボルネオ島のマレーシア領などを転々とし、フィリピン西端のマンシという小さな島で人生の最後を迎えた。熱帯鑑賞魚や真珠貝を専門に潜っていたこともあるが、マンシではナマコ漁師として生活していた。ダリオとは一九九七年七月に一度話をしただけだ。四角い顔に骨太の体格をしたゴツイおじさんだったが、愛敬のある人物だった。

## 「肥大化」するナマコ漁

周囲が三キロメートルほどのマンシ島には、およそ六〇〇〇人がゴチャゴチャと生活している。その九割以上がサマというムスリム、残りがビサヤと呼ばれるキリスト教徒である。マンシの経済活動はおもに南シナ海を漁場とするダイナマイト漁・ナマコ潜水漁のふたつの漁業からなりたっている。ダイナマイト漁で捕獲された魚はすべてが干魚に加工され、ミンダナオ島西部のサンボアンガを経由してダバオへ出荷される。それを消費するのは、ダバオ周辺に広がる、バナナやパイナップルなどの農園で働く人びとだ。一方干ナマ



潜水用の自家製のオモリと足ヒシ。

コはマニラから香港や韓国などへ出荷される。『ナマコの眼』の著者鶴見良行は、干ナマコの利用文化の発達について三段階を想定している。第一階は東北アジア地域に救荒食品としてナマコの加工が起こった時期。第二段階は漢人によってナマコ料理が洗練された時期をさす。そして漢人の食欲が南海まで伸びていったのが第三段階である。しかし、マンシのナマコ漁を観察していると、現在の干ナマコ利用文化は鶴見の記述しえなかった第四段階を迎えているのではないかと、考えたくなる。生産の「肥大化」がその特徴である。

## 限界を越えて潜るダイバーたち

マンシのナマコ漁の特徴のひとつは共同漁にある。一〇〜二〇トンの木造船に四、五人が乗りこみ、一か月以上にわたって操業する。ナマコ船にはコンプレッサー（註）はもちろんのこと、水深と海底の地形をはかるための魚群探知機とナマコを煮るための灯油コンロが備えられている。四〇日間の操業中にドラム缶四〜五本分の灯油を使用する。平均的な操業費は二〇万円である。わたしが知る限りでは、太平洋でも東南アジア地域でもこのような大規模なナマコ漁の事例はない。

コンプレッサーが導入される八〇年代以前には、南シナ海ではなくマンシやパラワン島近海でナマコは獲られていた。コンプレッサーの導入後もしばらくは近海での操業がつづいた。しかし、漁獲量が減ってきたために南シナ海へ進出したのだという。八〇年代後半から九〇年代初頭のことである。当時の南シナ海には、五メートルも潜ればナマコは踏みつけそうなほどたくさんいたという。

しかし現在操業するのは、水深三〇〜五〇メートルの海底である。アマチュアのスキューバ・ダイバーは水深三〇メートルが潜水の限界だと教えられる。そもそも水深三〇メートルを超えると、暗くなって視界が極端に悪くなる。熱帯とはいえ、水も冷たい。かじかんだ指が思いどおりに動いてくれないことも珍しくない。そんなわたし自身の経験から、九七年の調査時点では五〇メートルも潜ると

いうダイバーたちの話を信じる気になれなかった。しかし、一年を経てマンシに戻ってみると、ダリオの他にも二人が死亡していたし、一人が下半身不随で歩行困難な状況にあった。なかには七〇メートルの深さまで潜った人もいる。

## ナマコ・ファイバーに沸く島

この危険なダイビングを請け負って

るのがビサヤである。一方サマは、船頭や雑役夫として南シナ海に赴くことはあっても潜ることはほとんどない。「潜水は危険」だという。このように両者の役割分担が明確になっていることもマンシのナマコ漁の特徴のひとつだ。ビサヤがマンシに定着するようになったのは九〇年代初頭のことだ。サマが南シナ海に進出した時期とほぼ一致する。当時のダイバーの報酬は約一か月の航海

につき、日本円で約二〇万円。この金額は定年まぎわのフィリピン国立大学教授の月給の四倍に等しい。漁で蓄財したサマの中には、メッカ巡礼を果たし「ハジ」の称号を得た人も多い。

ナマコ・ファイバーの話聞きつけて、マンシのビサヤ人口は急増した。現在もマンシを目指すビサヤは後をたたないが、実際に成功することは難しい。高額な報酬が得られたのは九〇年代半ばまでのことだ。現在では四万円になればいいほうである。危険を承知で潜っても、借金ばかりが増えるダイバーもいる。ナマコをめぐる環境は刻々と変化している。フィリピンの輸出統計によると九四年以降、ナマコの輸出量が減少しているのに対して、輸出額は上昇している。このことは、高級種に限らず約二〇種あるナマコ全体の価格が高騰傾向にあることを示唆している。輸出品の減少傾向は、ナマコ資源の減少と解釈できよう。いや、だからこそナマコが高くなっているのだらう。今後も資源量と価格はイタチごっこを続けていくにちがいない。最後の処女漁場であった南シナ海を開拓してしま



ナマコに沸いた島にはハジが多い。ハジの墓には、白い布が巻きつけられる。フィリピンでもマンシ島だけにみられる習慣である。

つた以上は、「深さ」として漁場を捉えることになる。南シナ海には、今日も深く潜る人がいる。

(写真はすべて筆者撮影)

(あかみね、じゅん/地域研究企画交流センター)一九九七年生。九二〜九七年フィリピン大学に留学。フィリピン南部から東インドネシア海域にかけての水産物資源と人間との多様な関わり方に興味を抱いている。

▼註 コンプレッサー(compressor)海中に空気を送り込む装置。潜水具としては、タンクを背負うスキューバ方式とコンプレッサーからチューブをつたって送られてくる空気をチューブからそのまま吸いこむフーカー(hookah)方式の二種類がある。マンシでは、後者が普及している。



マンシ島周辺は、輸出用のタコやイカの産地でもある。なかにはマレーシア側までタコ漁にでかける人も少なくない。タコは、米国へ輸出され、スポーツフィッシングの餌となる。